

学生会員の

声

●私の中のボランティア●

1995年10月兵庫県宝塚市、震災の傷も癒えぬ間に私は生まれました。私たちは文字通り被災地の希望であった。それからなんだかんだで、博士学生として、化学工学、特に熱に関する研究をおこなっている。私がこの原稿を書いているのは2021年3月、東日本大震災からちょうど10年。震災をルーツに持つものとしてこの時勢を見逃すことはできなかった。本稿の趣旨とはずれているかもしれない。だが、これが紛れもない私の「声」である。

2011年3月11日、その日は中学校の卒業式であった。下校後寄った学習塾から帰った後、自宅のTVを見て愕然とした。津波に飲み込まれる家屋、燃えているガスタンク。翌日には原発の建屋が爆発した。まるで映画の世界だ。それから日常が狂ったような気がした。

自分の選択は常に後ろ向きの理由に支えられている。進路として理系を選んだことだって、自分自身には何をやる力もないと信じていたためだ。研究の世界なら私のような社会不適合者でもかろうじて生きていけるのではないだろうか、などと失礼なことを考えていた。環境やエネルギーについて学びたいと思ったのも、自己肯定感の低さが理由だ。あの事故が頭の片隅にあった。

私の進学先は神戸大学。第一志望ではなかったが、掛け替えのない地となった。神戸大学は、学生ボランティア発祥の地である。阪神淡路大震災を契機に生まれた学生ボランティア団体が今でも自主的に活動を続けている。諸々の理由でそこに足を踏み入れた私は、良くも悪くも震災に取り憑かれた。コミュニティ支援、復興祭、災害派遣、団体運営。思い返せば色々やったものだ。できることがないなどともない。自分に力がないということ自体が、自分の思い上がりだと知った。この世界は私のできることと、できないことであふれている。

ボランティアは少なくとも外から見ると綺麗なものではない。聖人君子はそれほどいないし、どちらかと言えばろくでなしが多い。気のいい人や志の高い人がやめている、なぜ自分がそこにいるのかも分からないような人たち

が、ずっと活動を続けていたりもする。そういった不思議な世界だ。しかし、酒のために活動をするろくでなしでも、様々な思いを持っている。私たちも、活動を通して様々な考えに触れ、議論し、葛藤してきた。私の学部の思い出のほとんどがこちらの世界で過ごした記憶だ。震災とは何か、支援とは何か。ボランティアとは何か。その答えを考えることに執着していた。

一度価値観の核が生まれると中々それは変わらないらしい。化学工学の研究室に入ってもこの頃の思いは消えなかった。研究の意義にしか興味が向かず、ただ何かを解き明かしたいという情熱が薄い。結局、私は知識欲に全てを溺れさせることができる人間ではなかった。

化学工学は実用的であるが、生活からは遠い学問だと思う。研究で得た知識が日常で役に立つことは稀だ。それゆえ、これを学んで良かったと思う機会が少ない。就職先の候補もB to Bが主流である。そもそも企業の中どれだけ高尚な理念を掲げようが、所詮ただの営利活動にすぎない。そこに何かの意義を見出せるのだろうか。それが誇れる生き方なのだろうか。そんなことを思っていたら、修士で就職する機を逃した。

だが、私の研究は意義深いものだ。原子力に変わるエネルギー源として、熱を利用する方法を提案している。原子力の研究者には悪いが、あれは人類の、というよりはこの国の手に余る存在だと思う。日本はいつ地震や津波に襲われるか分からないような島国だ。それらの災害に対応する能力が国も電力会社にも到底あるとは思えない。だから、これらの研究を成功に導くことは私にとっても大切なことだ。

故郷を失った人、避難先で迫害された人。それらが原因で命を失った人。件の事故については、そうしたことにばかりに目が行ってしまふ。ボランティアはつくづく個に注目する活動だ。もしも我々が成功したら、彼らに報いることができるだろうか。だが、同時にこうも考える。我々が仮に成功したとして、この社会は変わるのだろうか。社会の重鈍さはボランティアをやっていた人なら誰もが知っている。

偉くなりたい、と思った。科学は弱い。少なくとも今は。科学者が何かを訴えても、それで社会は変わらない。正しいことが世の中に伝わらず、イデオロギーの狭間で腐敗に染まって消えていく。それではいけない。正しいと思うことを正しいと言いたい。そのための力が欲しい。それこそが、私の中のボランティア。不条理ばかり起こる世の中も、弱者が弱者であることを許さない世間も、全ての不幸をなかつたことにして生きてる人たちも。私は全部が憎くてたまらない。それら全てを壊して、人に優しい社会が欲しい。科学というものは、ただただそのために、あって欲しいと思うのだ。

(神戸大学工学研究科博士後期課程2年 大坪拓夢)